

「そば」に関する意味・語用論的考察

麻生迪子*

目次

1. はじめに
 2. 問題の所在と先行研究
 2. 1 多義語先行研究
 2. 2 「そば」に関する先行研究
 3. 分析の方法
 3. 1 データ
 3. 2 方法論
 4. 空間を表す「そば」と「近く」の比較
 5. 用法間の類縁性
 5. 1 親疎を表す用法と時間を表す用法
 5. 2 親疎を表す用法
 5. 3 時間を表す用法
 6. 結論
-

1. はじめに

本稿は、「そば¹⁾」の意味構造について考察する。「そば」は、以下の例文から分かるように複数の意味が存在する。

* 又松大学校 日本学科 講師

1) 本文中の表記は、「そば」と統一する。例文中の表記は、原文に沿って「側」「傍」などの漢字表記を用いることもある。

(1)a.河町の町方の土地は、平河天神という徳川家の江戸開府以前からあった小さな鎮守のやしろを中心にひらけたらしい。神社のそば²⁾が一丁目で、遠ざかるにつれて二丁目、三丁目となっている。

(司馬遼太郎『胡蝶の夢』1)

b.あと十年経てば、保之助は元服を終わって嫁をもらいます。そうしたら、私はおひまをもらって北見のそばに参ります。

(藤沢周平『よろずや平四郎活人剣』下)

c.歳を取ると物覚えが悪くなり、聞くそばから忘れてしまう。

(<http://ws.31rsm.ne.jp/~toolware/dictionary/127.html>)

(1a)、(1b)は何らかの「空間」を表しており、一方(1c)は、何らかの「時間」を表している。一つの音形に二つ以上の意味を有する語は、「多義語」と「同音異義語」である。本論では、「多義語」「同音異義語」の定義として、以下国広の定義を用いる。

(2)「多義語」

同一の音形に意味的に何らかの関連をもつふたつ以上の意味が結びついている語
「同音異義語」

一つの音形に、意味的に関連をもたない二つ以上の意味が存在する二つ以上の語。

國廣(1982:98)

多義語と同音異義語は本質的に連続しており、両者を明確な境界で分けることは困難である³⁾。本論の考察対象である「そば」は「多義語」と「同音異義語」のどちらに属するのであろうか。(1a)と(1b)は近接した「空間」を表しており、(1c)は、近接した「時間」を表している。すなわち、(1a)(1b)と(1c)は表す対象は異なるが、その基準点に対する「近接性」を表示するという点は共通している。このことから本論は、(1a)～(1c)は意味的に関連があると見なし、「そば」は「同音異義語」ではなく「多義語」であると考えられる。

多義語「そば」について考察した研究は、初山(1992)、砂川(2000)などがあげられるが、同じ空間と時間の意味を持つ多義語「アト」の研究に比べるとまだ十分に考察が為されていないと思われる。

2) 原文表記に下線を引く。

3) 多義語と同音異義語について、國廣(1982)は「同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことであると考えられるべきである」と述べる。

そこで本稿は、まず第二節で上にあげた先行研究を概観し、その成果および問題点を指摘する。次に第三節では、分析するにあたっての方法論について述べたい。3.1節では、本稿が取り扱うデータの属性を述べる。そして、「そば」の用法について見ていく。3.2節では、「そば」を分析するにあたっての方法論について述べる。第四節では、第三節で述べた方法論をもとにデータの分析を行う。ここでは、類義語「近く」と比較し、モダリティの観点から分析を行う。疑問文が作れる場合、疑問文が作れない場合を考察し、「そば」は「直示性」を有することを主張したい。第五節では、「直示性」をもとに、「そば」の用法間の関係を明らかにする。最後に第六章で本稿の主張と問題点を指摘し、本稿を閉じる。

2. 問題の所在と先行研究

2. 1 多義語先行研究

「そば」は「多義語」と見なした上で、ここでは多義語研究について概観する。現在、多義語研究は、通時的研究・共時的研究にかかわらず認知意味論において重要な位置を占めている。その代表的研究である初山・深田(2003)では、多義語分析の課題として、以下の3点をあげている。

- (3)①プロトタイプの意味の認定
 - ②複数の意味の相互関係
 - ③複数の意味全てを統括するモデル・枠組みの解明

各分析課題について説明をしよう。〈①プロトタイプの意味の認定〉とは、多義語の複数の意味全体を一つのカテゴリーとした場合、その中で最も基本的であり、慣習化の程度・認知的際だちが高いという特徴を持つ意味をプロトタイプの意味と認定する研究のことである。〈②複数の意味の相互関係について考察〉について述べよう。先に述べたように、多義語の複数の意味には何らかの関連がある。その関連について明らかにする研究のことである。そして、最後の〈③複数の意味全てを統括するモデル・枠組みの解明〉とは、多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、多義構造全体における個々の意味の位置づけを明示する研究である。これら研究課題と多義語に関するこれまでの研究を以下の表にまとめる。

表1

①プロトタイプの意味の認定

論文名	対象語	概要
初山 (1992,1995)	トコロ・ソバ・チカク	プロトタイプの意味の認定
定延(1999)	空間的分布を表す時間語彙	空間と時間の関係について記述
魏 (2003)	アト・サキ・マエ・ウシロ	「アト・サキ・マエ・ウシロ」の多義分析を行い、多義構造について考察する

②各用法間の類縁性

論文名	対象語	概要
砂川(2000)	空間表現	空間概念から時間概念への変化を動機づける意味の類縁性について述べる
青木(2000)	トコロ	トコロの用法分類と各用法の共通性について考察
阿倍(2000)	アト・サキ・マエ	空間表現の時間的意味の獲得について考察
阿倍(2001)	アト	空間表現アトからの時間表現への意味拡張について考察

③全ての用法を統括する枠組み・モデルの解明

論文名	対象語	概要
確井(2003)	アト	空間表現アトから時間表現アトへの意味拡張の過程と動機づけについて考察

表1が示すように、空間と時間の両方の意味を持つ多義語研究では、「アト」が最も進んでいる。しかし、「そば」に関しては、②諸用法の類縁性 ③意味拡張の経路という二つの観点では、詳細ではない、もしくは明らかになっていない。これら2点からの分析を行うことは、「アト」との対比により、空間から時間への意味拡張研究に新しい知見を与えるものと思われる。

2. 2 「そば」に関する先行研究

前節で多義語全般の研究の流れについてみた。さて今度は、「そば」に焦点をあて、先行研究を概観しよう。初山(1992)が明らかにしたことは、「そば」の空間的意味がプロトタイプ³の意味である、ということである。初山(1992)は生起条件の有標性によって、プロトタイプ³の意味の認定を行った。

(4) a. 彼がそばにいてくれると言うだけで、胸がドキドキする。

(遠藤周作『快男児・怪男児』講談社・遠藤周作文庫,146ページ)

b. 最近,家のソバにおしゃれな喫茶店ができた。

c. 覚えるソバから忘れる。

初山(1992:195)

(4a),(4b)の例文は何らかの「空間」を表しており、一方(4c)の例文は、何らかの「時間」を表している。空間の意味を表す(4a)は、修飾語句がなくても用いることができるのに対して、時間の意味を表す(4c)は、必ず修飾語句が必要であるという言語事実に基づき、初山は、「空間」の方をプロトタイプ³の意味とした。初山の「「空間」をプロトタイプ³の意味とする」という指摘は、本論でも妥当であると考えている。なぜならば、(4a)からわかるように空間的用法の「そば」は、それだけで空間的意味を表すことができる。しかし、時間的用法の「そば」は、(4c)より明らかのように必ず助詞の「から」を伴った、「そばから」という形で接続助詞的に用いられる。また、三章で述べるように時間的用法の「そば」は実際の談話、例文では殆ど出現しない。したがって時間を表す用法の「そば」は、自立性が低いと考えられ、空間を表す用法の「そば」の方がよりプロトタイプ³の意味と思われる。「そば」が空間を表す用法から時間を表す用法に派生したと言う見解は、これから述べる砂川(2000)とも共通するものである。砂川(2000)が明らかにしたことは、意味の拡張はメタファーによるものとし、「そば」の「近接して共存する」という空間関係が、時間概念に写し取られ、「出来事の継起的連続」という時間関係の他に「反復性」を表すこともある、ということであった。砂川は空間から時間への派生はメタファーによるものと述べ、次の例文を用いて空間的用法と時間的用法の類縁性を示している。

(5) 作るそばから食べてしまう。(継起・反復)

砂川(2000:128)

「そば」は表す対象は異なるが、その基準点に対する「近接性」の表示という点では共通している。「空間」的意味「そば」が近接した「空間」を表し、「時間」

的意味「そば」が近接した「時間」を表すことにより、空間を表す用法と時間を表す用法には類縁性を見ることができる。このことにより、「そば」の意味拡張は、メタファーによる意味拡張であると考えられる。したがって、本論は、砂川の指摘は、妥当であるとする。さらに砂川は、「近接的な共存関係を表すものではあるが特に側面とは限定しない「そばから」の場合は、ひとつの事柄の直後に別の事柄が生起するという継起的な時間関係の他に、その2つの事柄のセットが反復されるというアспектに関わる意味となる」と述べ、「これらの意味は、近接して共存するという空間概念が時間概念に写し取られたものである。」と述べる。しかし、なぜ近接して共存するという空間概念が時間概念に写し取られると、「反復性」が生じるのか明確ではない。また空間を表す用法との類縁性も明確ではない。砂川(2000)は、「そばから」について「2つの事柄のセットが反復されるというアспектに関わる意味となる」と簡単に述べているが、それだけでは十分な記述とは言えないだろう。詳細な記述が必要である。そして砂川(2000)では、時間を表す用法と空間を表す用法の類縁性について記述しているが、「そば」には時間と空間を表す用法以外の用法も存在する。その用法と空間を表す用法との類縁性についても考察する必要がある。

3. 分析の方法

3. 1 データ

まず、本論文が取り扱うデータは、小説とインターネット検索サイト「google」から収集した。データ収集に用いた小説は、計19冊である。用例は、計179例集まった。インターネットから収集した用例は、153例である。分析するにあたって取り扱ったデータは、合計322例である。これらの用例を、その意味別に分類すると、空間を表す用法は、181例、親密や親しさを表す用法は、25例、時間を表す用法は153例となった。

まず、「空間を表す用法」とは、近接した空間を表す用法である。空間を表すということを明示する格助詞「に」「で」を含む例文をあげる。

(6) 和田を車に待たせ、波子と一男は細い木でできた門から中へ入った。入り口のそばで会った水汲みの少女に聞いたらエレナの家はすぐ分かった。

(なかにし礼『赤い月』下)

(7) 「王、今夜一晚、頼んだわよ」傘をさして門のそばに立っている王にそう一声かける

と、波子は家に入り、ひたすら朝が来るのを待った。

(なかにし礼『赤い月』上)

そして、親密や親しさを表す用法を「親疎を表す用法」と本稿は呼ぶ。「親疎を表す用法」では、「(基準点)のそばにいる」という存在を表す文が多く見られた。したがって、ここでは、「(基準点)のそばにいる」という存在を表す文をあげる。

(8)次郎だけはいつもあたしのそばにいてもらえるわね

(下村胡人『次郎物語』上)

「時間を表す用法」では、「そばから」の前後の内容が反対の意味を表す例文が多かった。しかがって、ここでは「そばから」の前後の内容が反対の意味を表す例文をあげる。

(9)息子はこづかいをやったそばから使ってしまう。

(<http://www.bl.mmtr.or.jp/~idu230/his/wa/tesuto/1-1.htm>)

3. 2 方法論

分析するに当たっての方法論について述べよう。第二章で述べたように、「そば」は空間を表す用法がプロトタイプと言える。そこで「そば」の用法間の類縁関係を明らかにするためには、この空間を表す用法の意味を明らかにした後、それを他の用法と比較するという方法が有効である。空間を表す用法の分析にあたっては、國廣(1985:202)に提示されている「対照的作業原則」と「呼応の作業原則⁴⁾」を用いる。「対照的作業原則」とは、分析する語のみを分析するのではなく、用法が少しずれていると思われる類義語と比較対照しながら分析をすすめるという原則である。一方、「呼応の作業原則」であるが、これは、服部(1968:62)において述べられており、「互いに統合され得る自立語は、お互いに呼応する語義的意義特徴を有する」という作業原則である。これらの原則に従うならば、「そば」の分析にはその類義語である「近く」との比較対照が不可欠であることがわかる。そこで、「そば」と「近く」の比較対照をしながら両者の類似点と相異点を明確にする。手順としては、まず「近く」が用いられた例文が、「そば」と言い換えられない場合を観察する。次に、「そば」と「近く」の言い換えができない場合を観察し、空間を表す用法「そば」の特徴を明らかにする。

4) 國廣(1985)は服部(1968:62)の方法論を踏襲した。

4. 空間を表す「そば」と「近く」の比較

空間的意味の「そば」と「近く」について考察した研究は、奥津(1974) 森田(1991) 田他(1998)がある。これらの研究は、「そば」と「近く」について極めて有益な指摘を行ったが、さらなる分析の余地もある。森田(1991)と田他(1998)は、「そば」と「近く」両者とも基準点からあまり隔たっていない距離を示す」という。そして、「そば」は「近く」に比較すると、「基準となるものに視点を置く」という特徴があると述べる。しかし、この記述だけでは、「そば」の他の用法と空間を表す用法の類縁性が明らかではない。そこで、前節で述べたようにこの節では、「そば」と「近く」が言い換えることができない場合を分析する。

(10)a. 太郎は言われるままに灯りのそばの近くに進み寄った。

b.*太郎は言われるままに灯りの近くのそばに進み寄った。

上の例のように、基準となるものの「そば」の「近く」には進み寄ることができるが、(10b)のように「近く」の「そば」には進み寄ることができない。「そば」「近く」ともに、基準点から隔たりのない距離を示すが、この例をみると、基準点と関わりを持つ領域が異なっているように思われる。実際の用例を見ていくと、「そば」と「近く」が言い換えられない、もしくは言い換えると不自然になる場合は多い。例えば、見知らぬ街にて、喫茶店を探す場合、(11)のように尋ねるのが普通であり、(12)は不自然である。なぜ(12)は不自然になるのだろうか。

(11)ちかくに喫茶店がありますか？

(12)？そばに喫茶店がありますか？

聞き手と話し手が同じ場所にいる対面の問答である場合に、(11)が用いられたならば、「そば」は不自然である。しかし、(12)の文は肯定文にした場合、不自然ではない。

(13)そばに喫茶店があります。

なぜ、「そば」は疑問文にすると不自然になるのだろうか。この現象をモダリティという観点から分析を行う。仁田(1999:97-98)によれば、そもそも問かけができるのは

以下の条件がそろったときである。

(14)①話し手に不明な点が存在する。

②話し手は、聞き手がその不明な点を解決する情報を提供することができると思っている。

仁田(1999)は、問いかけの対象となるものは、聞き手にとって知りうる客体的な対象化された言表事態(15)(16)であるとし、逆に問いかけの対象となりえないのは、話し手にとって自明の事柄であると述べている。例えば、話し手の決意や話し手の感情・感覚といった心的態度や内的状態(17)は、話し手のほうが聞き手よりもよく知っているため、問いかけることは不自然である⁵⁾。

(15)彼女は大学生ですか？

(16)君は昨日大学へ行きましたか？

(17)? 僕はお腹が痛いですか？

(11)が疑問文として成立できるのは、①②の用件がそろっており、かつ問いかけの対象が「客体化」された言表事態であるためと考えることができる。ここで問題となるのは、(12)である。(12)の問いかける対象は喫茶店の有無という客体的な事柄であるのに関わらず、話し手と聞き手と同じ場所にいる時、疑問文として成立しないからである。このことから、(12)は(17)と同じく、その「問いかけ」の対象が話し手にとって自明の事柄であると考えることができる。

つまり、(12)の不自然さは、「そばに喫茶店がある」ということが話し手にとって自明であることに起因するだろう。対して(11)の自然さは、「近くに喫茶店がある」ということが話し手にとって自明ではないことに起因している。では、なぜ(12)は話し手にとって自明の事柄であるのだろうか。ここで、一つの仮説を提示しよう。(12)が話し手にとって「自明」であるのは、「そばに喫茶店がある」を発話する際の「そば」の基準点は、「話し手自身である」とであると仮定しよう。基準点が「話し手自身」であるならば、喫茶店は自ずと目に入るだろう。そうであるならば、仁田(1999)が問いかけの条件としてあげた「話し手に不明な点が存在する」が満たされない。その結果、(12)は不自然な疑問文となる。

「そば」の基準点が話し手自身であることは、(18)の例文が不自然であることに

5) 仁田(1999:97-98)では、問いかけが可能になる場合として、「決意や感情・感覚そのものではなく、その外的現れ」をあげている。例：「俺、そんなに金欲しがっている？」

よって示される。(18)の例文は、「基準点が明示されない場合の「そば」は、話し手自身であり、話し手を中心とする周囲を表す」という仮説に基づいたものである。例えば、研究室の扉の前に(18)が貼られていたとしよう。

(18)今、席を外しています。3時に戻りますので {?そば/近く} でまわっててください。

(18)の「そば」は不自然である。(18)が「そば」をとることができないのは、次のように説明ができる。「そば」は話し手(書き手)の周囲を表す。しかし、その話し手(書き手)の所在が不明にも関わらず、聞き手(読み手)は話し手(書き手)の周囲で待ち続けるということが理解しがたいためであろう。(18)が不自然であることにより、基準点を明示しない「そば」は、話し手を基準とし、話し手を中心とする領域を表すことがわかる。「そば」の「基準点を明示しない時、話し手を基準とし、その周囲を表す」という性質は、「空間の直示」の特徴に合致する。「空間の直示」は、「中心の場所は、発話時、あるいは言語空間時における話し手の場所である」という特徴を有する。この特徴は、「そば」の「基準点を明示しない時、話し手を基準とし、その周囲を表す」という特徴と類似している。

以上の議論から本稿は、基準点を明示しない「そば」は「直示性」を有すると考える。それに対して、「近く」は「直示性」を有さない。

5. 用法間の類縁性

5.1 親疎を表す用法と時間を表す用法

「そば」が持つ「直示性」によって、用法間の類縁性を説明することが可能である。三節で述べたように「そば」には、「空間を表す用法」の他に「親疎を表す用法」「時間を表す用法」がある。空間を表す用法がプロトタイプの用法であることは、これまでの先行研究により明らかになっている。本論もその立場を踏まえることは、第二章で述べた通りである。そして、プロトタイプの用法からその他の二つの用法が派生したと本論では考える。つまり、親疎を表す用法と時間を表す用法との間には派生関係がないとする。なぜならば、時間を表す用法の例文、親疎を表す用法の例文を見ていくと、それぞれの用例に空間を表す用法ともとれる例文があるためである。そして、空間を表す用法の例文には、時間を表す用法、親疎を表す用法ともとれる例文があるためである。それに対して、親疎を表す用法、時間を表す用法、両用法間に

は類縁性がみられなかった。親疎を表す用法の例文に、時間を表す用法ととれる用例はみあたらなかった。同様に、時間を表す用法の例文に親疎を表す用法ととれる用例はみあたらなかった。

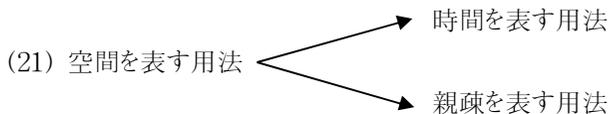
(19) 与平はあせるなあせるなど、子供をあやすように側をはなれず、少しでもあぶないと見とすぐに手を貸そうとする。

(山本周五郎『さぶ』)

(20) その厚揚げを揚げているそばから、切って食べさせてもらったんですが、カラッと揚がってサクッとした食感、プリッとした中身、そしてほんのりと豆の香りと甘さがありました。

(<http://www.tbs.co.jp/radio/stand-by/talk/mon/index-j4.html>)

(19)は、「喧嘩によって怪我を負い、体が不自由になった主人公の支援のために「そば」にいる」、という例文である。この例文の「そば」は、支援のニュアンスとも単なる近接とも読みとれる。(20)は、「人気の厚揚げをあげている、その横で、その厚揚げをたべさせてもらった」という例文である。この例文の「そばから」は、時間的意味とも空間的意味ともとれる。これらのことより各用法の関係は以下である。



時間を表す用法と親疎を表す用法は、空間を表す用法からのメタファーによる拡張であるため、用法間には類縁性が見られる。この節では、以下各用法の特徴について述べるとともに各用法間の類縁性についても記述する。

5. 2 親疎を表す用法

親疎を表す用法は、実際の地点を指さない。「親密」「支援」といった基準となる人間（あるいは擬人化されたもの）とのプラスの関係を表す用法である。

(22) 「そんな男のそばにいる女は幸せだわ。私も男だったらそうありたいもの。」

(なかにし礼『赤い月』上)

(23) ウサギのミミのそばにはいつもキツネのゴンタがいた。

人間が基準となっているのは、(22)である。人間でないものを基準とする場合、擬人化される(23)。

(24)それならそんなにあまったらるな、二十五といえはもう子供の一人や二人あってもいいと
しごろだ、おれが側になければ心ぼそいなんて、そんなあまっちゃういことで世の中
が渡ってゆけると思ふのか。

(山本周五郎「さぶ」)

(24)は、ぐずと周囲の人間から言われるさぶが、「自分は職人としては未熟であるの
で、一緒に店をやろう」と栄二に依頼するが、栄二がさぶの依頼に対して断る場面の
例文である。この「そば」には、「支援」のニュアンスがある。このように「そば」か
ら「親密」「支援」というニュアンスが生じるのは、「そば」が基準となるものの領域
を表すためであると考えられる。「そば」という実際の距離がメタファーにより感情的距
離を表し、さらに領域内に位置するということにより、「親密」「支援」といったニュア
ンスを伴うと考えられる。このように実際の距離が「感情の距離」を表すことは、次の
例からも明らかである。

(25)A「昨日の会合で、大山さんに会いました。その人は、あなたを知っていると行ってま
したよ。」

B「さて、だれかな。その人はどんな人ですか」

小泉(2000:25)

話し手のみ、もしくは聞き手のみしか知らない事柄に対しては、(26)のように「ソ」系
指示詞を用いる。または、「コ」系指示詞でも言い換えることができる。

(26)A「昨日の会合で、大山さんに会いました。この人は、面白い人ですね」

B「あの人は愉快な人です」

小泉(2000:25)

この場合は、話し手が指示対象に接近し、話し手領域(これ)に取り込み、指示
対象に対して興味と実感を高めている⁶⁾。距離によって感情的距離を示し、話し手領
域に取り込むことにより、興味と実感を表している。「そば」にもこの原理が働き、距離
の近さを示すこと感情的距離を示し、話し手領域に位置することにより、「親密さ」
「支援」といった意味が表出すると考えられる。

5. 3 時間を表す用法

時間を表す用法は、接続助詞「から」と結びつき、「そばから」という形式で接
続助詞的に用いられる。「そばから」を用いた文を本論では、「そばから」構文と呼

6) 小泉(2000:26)に記述あり

ぶ。「そばから」構文は、『基礎日本語辞典』によると、「～するとすぐ、」という記述がなされている。「そばから」構文は、二つの文によって成り立っている。

(27)「そばから」構文→S1そばからS2

本稿では、前文をS1とし後文をS2とする。実際に例文を集めてみると、平叙文ばかりであった。

(28)これにより、お使いのMacの隅々まで「明かりを照らして」検索語を入力していくそばからスピーディに結果を表示できます。

(<http://www.apple.com/jp/powermac/software.html>)

(29)同時通訳に欠かせない技術だが、これは普通の英語の聞き取りにも欠かせない。一般の学習者は、訳す必要はないので、聞き取ったそばから理解していくコツをつかむとよい。

(<http://www.alc.co.jp/eng/hontsu/t-kunren/06.html>)

では、「そばから」構文の統語的特徴から見ていきたい。S1とS2には、文の最小単位である述語、つまり動詞のみ(30)でも用いられることもあれば、主語と述語を含んだ形(31)でも用いられる。

(30)習うそばから役立ちます！

(http://www.u-can.co.jp/course/data/in_html/114/special.html)

(31)彼が稚魚を放流するそばからブルーギルやブラックバスが群がり、稚魚はまたたく間に食い尽くされてしまう。

(http://www.nacsj.or.jp/old_database/gairaiшу/gairaiшу-02.html)

「動作の連続を表す」という点において、「そばから」構文は、接続詞「～と」「～て形接続」と類似している。しかし、「そばから」構文は、動作の連続を表す接続詞「～と」「～て形接続」とは文法的な振る舞いが異なる。「そばから」構文の方が、接続詞「～と」「～て形接続」よりS1とS2の結びつきが強く、S1のS2への従属度が高い。S2のS1に対する結びつきの強さを久野(1973)で用いられた構文テストによって明らかにすることができる。

(32)作るそばから売れていきます。

(<http://www.cgr.mlit.go.jp/chiki/doyroj/station/month/200504/ajisu/ajisu2.htm>)

(32)a.作る {とすぐ} 売れていきます。

(32)b. 作っ {てすぐ} 売れていきます。

(32)は実際の例文である。これを「意志文：ようとする」に変えてみる。

(33) [作るそばから売ろうとする]。

(33)a. 作る {と [すぐ} 売ろうとする]。

(33)b. [作っ {てすぐ} 売ろうとする]。

(33)c. 作っ {て [すぐ} 売ろうとする]。

前文と後文を切り離れた解釈ができるものは、従属節である前文の従属度が低く、前文と後文は結びつきが弱い。しかし、「そばから」構文はS1とS2を切り離すことができない。それゆえ、S1とS2の結びつきが強いことがわかる。つまり、(33)の例文では、「作る」と「売れていく」が切り離せない事態を表していると考えられる。(33)の解釈は、「作るとすぐに売ろうとする」という解釈である。意志性は、文全体にかかっている。このように「意志文：ようとする」を作る場合も、「そばから」構文は、S1とS2を切り離すことができない。(33b)は、「そばから」構文と同様に解釈がなりたつ。しかし、「と」接続(33a)と「て形」接続(33c)は、前文と後文を切り離れた解釈になる。(33a)、(33c)の解釈は、「すぐに売ろうとする」という解釈である。意志性は「売る」という出来事にかかっている。

「そばから」構文を「意志文」に言い換えることで、S1とS2の結びつきの強さをみた。「そばから」構文は、S1とS2を切り離れた解釈ができないことより、S1とS2は単一の構成要素を作っていると考えられる。次に、S1とS2の時間関係に注目して分析を進めよう。「そばから」構文の時間関係は、2種類存在する。「A:S1の終了後にS2が生じるという時間関係」と「B:S1の最中にS2が生じるという時間関係」である。

A：S1終了後にS2が生じる場合

(34) 拾うそばから落ちてくる栗を探すのも、童心に返った様な楽しさで、学校の行き帰りに小学生も立ち寄っては拾って行きます。

(<http://www.naf.co.jp/maruyashinkan/news2004.stm>)

(35) 直径80センチほどの円形炭火コンロでガンガンと焼いたが、焼いたそばから肉がなくなっていく。

(<http://www.alc.co.jp/kaigai/world/bris/bn/281.html>)

(34)では、S1である「拾う」が終了した後にS2「栗が落ちている」が生じている。
(35)では、「焼く」が完了した後にS2の「肉がなくなっていった」が生じている。

B：S1が継続している最中にS2が生じる場合

(36) 1人の子の話を聞いているそばから、ほかの子が席からいなくなった。
(http://www.shizushin.com/feature/teacher_index/teacher/20050708142831.htm)

(36)では、S1「話を聞いている」という行為が続いている間に、S2「ほかの子がいなくなった」が生じている。このように「そばから」構文には、A、Bという時間関係が存在する。これらの時間関係から言えることは、「そばから」構文は、S1とS2の継起的成立を表すと言える。またA、Bの例文をアスペクトの観点で比較を行うと、BはS1の動詞の形態が「ている形」である。それに対し、AはS1の動詞の形態が「る形」「た形」である。Aの時間関係では、S1の動詞に「完了性」が読みとれる場合は、「る形」「た形」でも時間関係は変わらず、S1の完了後S2が生じたと解釈される。しかし、(35)のようにS1の動詞に「完了性」が読みとりにくい場合は、「る形」「た形」で意味が異なる。例えば、(35)の例文でS1の動詞「焼いた」が「焼く」では不自然である。(35)の解釈は、生焼けの肉を食べているという解釈である。

(35)直径80センチほどの円形炭火コンロでガンガンと焼いたが、焼くそばから肉がなくなっていった。

次にS1の出来事とS2の出来事の関係性について見てみよう。「そばから」構文は、S1とS2の結びつきが非常に強く、切り離すことができない。S1とS2は、前件で実現する事態と後件で実現する事態が一連の動作として継的に実現するものとして分かちがたく結びついている。

(36)安全性を強調するそばから、日本の原子力施設は事故やトラブルが発生し、目に余るものがある。

(<http://www.jnfl.co.jp/mox/pdf/04cycle-pru.pdf>)

(36)のS1とS2は、一連の出来事を表している。(36)は、S1「(原子力発電所の)安全性を強調する」と、すぐにS2「日本の原子力施設は事故やトラブルが発生する」が生じる。S1とS2は、一連の出来事であり、S1の出来事後すぐにS2の出来事が生じており、これらの出来事は時間的に近接している。そのため、S1とS2とが明らか

に別の出来事を表すような場合は、不自然である。

(37)CDを買ったそばから聞く

(38)*タワーレコードでCDを買ったそばから家で聞いた

(37)は不自然ではないが、(38)は不自然である。(37)(38)は、S1「CDを買う」とすぐS2「その買ったCDを聞く」という出来事が生じている。しかし(38)は(37)と異なり、S1とS2に場所を示す語がある。(38)が不自然であるのは、出来事の生じる場所を明示することにより、S1とS2の連続が含意されなくなり、S1とS2は単一の構成要素を生成できないためである。さらに、「そばから」構文は、「反復」のニュアンスを伴う傾向がある。

(39)コメントを書いたそばからプレビュー表示してくれます。

(<http://detlog.org/archives/category/web-memo/page/3/>)

(39)は、「反復性」を伴う。(39)では、S1「コメント」を書く度にS2「プレビュー表示される」と解される。「反復性」は「そばから」構文全てにみられるものではない。

(40)社長とお客さんはそれぞれ「カレー南蛮」「卵とじそば」と温かいメニュー選択。汗かきながら食べるんだそうだ。しかし頼んだそばから後悔の様子。お隣の天せいろにあああ。

(<http://nao3.main.jp/blog/sb.cgi?cid=37>)

この例文には、「反復性」はない。「一回的な出来事」を表している。工藤(1995:147)によると、「反復性」とは「運動の展開時間の複合的捉え方である」と述べる。「反復性」とは、運動の一つ一つを、点として完的にとらえ、同時に、その集合としての全体運動は時間的に限界性を有さない、線として継続的に捉えることにより生じる。つまり、「反復性」とは、「そばから」構文の有する意味ではなく、S1の動詞とS2の動詞の捉え方によって生じるものである。この節では、「そばから」構文の特徴を議論したが、以下の2点にまとめられる。

(41)a.S1とS2は継起的成立

b.S1とS2の結びつきが強い

この特徴と空間を表す用法との類縁性について考察してみよう。この特徴は、空間

を表す用法からメタファーによって生じたと考えられる。つまり、S1に基準点を置き、そこからの隔たりが時間軸上に投影されている、ということである。deixis center、言い換えると基準点S1からの隔たりが非常に近接であるため、S1とS2が連続して生じることを表し、S1とS2は連続して起こりうる一連性、結びつきの強さを有するのである。

6. 結論

本稿は、場所を表す「そば」の用法間の類縁性について考察した。本稿の主張は、以下にまとめられる。

- (42)a. 場所を表す「そば」は直示的近接を表す。
- b. 「親疎」をあらわす「そば」は、基準となる人物の領域内をあらわす。そのなかに位置することにより、「支援」「親愛」といったニュアンスを伴う。
- c. 時間を表す「そば」は、基準となる出来事からの時間的隔たりを表す。そのため、「出来事の継起的連続」「出来事間の結びつきの強さ」という特徴をもつ。

今後の課題として、空間から時間への意味拡張を明らかにするモデルの構築を目指したい。また、本稿では、「そばから」構文の用法を資料として用いた小説から収集できなかったため、インターネット⁷⁾から収集した。インターネット上しか見られない用法を「用法」とみなしていいかどうか、意見が分かれるところである⁸⁾。しかし、「そば」の時間的意味は、辞書にも記載され、日本語能力試験2級の表現文型の一つである。なぜ、ネット上でのみ用例が存在するのか、なぜ助詞「から」と結びつくのか、という点も興味深い点である。以上が今後の課題である。

7) インターネット上には「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)といったネットで公開されている小説もある。

8) 「そばから」構文は、「青空文庫」よりも口語で記述されたサイトから多く見つかった。また「青空文庫」で見つかった用例は、出典が非常に古く、時代的な要因も存在する可能性がある。

【参考文献】

- 青木三郎(2000)「<ところ>の文法化」
青木三郎・竹沢幸一(編)『空間表現と文法』,77-103 くろしお出版
- 麻生迪子(2006)『そばに関する意味・語用論的考察』九州大学大学院修士学位論文
(未刊行)
- 阿部宏(2000)「空間から時間へ: さき,あと,まえ」
『東北大学文学研究科研究年報』50号,191-204
- 阿部宏(2001)「あとの時間的用法再考」『東北大学文学研究科研究年報』51号,245-256
- 碓井智子(2003)「空間から時間へ～「アト」(跡・後)認知意味論的観点からの考察～」
『日本認知言語学会論文集』第3巻,63-71
- 魏聖銓(2003)「「あと、さき、まえ、しろ」－プロトタイプ的意味と意味転用」
『日本認知言語学会論文集』第3巻,54-62
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間表現』ひつじ書房
- 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 国広哲弥(1985)『意味論の方法』大修館書店
- 小泉保(2000)「直示」小泉(編)『入門語用論研究－理論と応用』,5-32 大修館書店
- 定延利之(1999)「空間と時間の関係－『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって」
『日本語学』第18巻9号,24-34 明治書院
- 砂川有里子(2000)「空間から時間のメタファー－動詞と名詞の文法化」
青木三郎・竹沢幸一(編)『空間表現と文法』,105-142 くろしお出版
- 田忠魁・泉原省二・金相順(1998)『類義語使い分け辞典』研究社
- 仁田義雄(1999)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 服部四郎(1968)『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 森田良行(1991)『基礎日本語辞典』角川書店

<出典資料>

- 司馬遼太郎(1983)『胡蝶の夢』1 新潮文庫、藤沢周平(1985)『よろすや平四郎活人剣』下 文芸春秋、なかにし礼(2002)『赤い月』上 新潮文庫、なかにし礼(2002)『赤い月』下 新潮文庫、下村胡人(1987)『次郎物語』上 新潮文庫、山本周五郎(1965)『さぶ』新潮文庫
- インターネット検索サイト「google」<http://www.google.co.jp/>

付記

本稿は、2006年度九州大学大学院へ提出した修士学位論文を加筆修正したものである。指導して下さった松村瑞子先生、山村ひろみ先生に心より感謝を申し上げる。

要 旨

本稿は、多義語「そば」の意味構造について、「そば」の各用法間の類縁性」という観点から分析をおこなった研究である。「そば」は空間的意味と時間的意味を有する語である。空間的意味と時間的意味をもつ多義語研究において、以下のことが明らかになっている。

・意味拡張は、メタファーによって「空間」から「時間」という方向で生じる。

これを踏まえ、「そば」の多義性に関する先行研究を概観した場合、「そば」の諸用法の類縁性の記述」という研究課題が存在する。

本稿はこの研究課題について、「そば」は「直示性」を有することを主張し、分析を行った。まず、「そば」を表す意味によって①空間を表す用法 ②親疎を表す用法 ③時間を表す用法という三つの用法に分けた。そして「直示性」をもとに、「そば」の諸用法間の類縁性について分析した。諸用法間の類縁性は以下の通りである。

- ・空間を表す用法から親疎を表す用法、時間を表す用法が生じた。
- ・親疎を表す用法は、「話し手の領域内」に位置することより生じた「親愛」「支援」といったプラスのニュアンスを表す。
- ・時間を表す用法は、空間を表す用法の「基準点からの近接」という点から生じた「継起性」を表す。

キーワード：多義語、メタファー、用法間の類縁性、直示性、話し手の領域内、継起性

투 고 : 2006. 11. 30
1차 심사 : 2006. 12. 9
2차 심사 : 2006. 12. 30

住 所 : (300-718) 대전광역시 동구 자양동 17-2 우송대학교 일본학과
電 話 : 010-7754-9414
e-mail : asomichi04@hotmail.co.jp